

2. ESD 塾の取り組み

小玉 敏也

(1) 「自磨の時間：遠山郷 ESD 塾」の概要

ESD 地域創生連携協定に基づき、2019 年 8 月 10 日～12 日まで、長野県飯田市の南信濃学習交流センターにおいて「自磨の時間：遠山郷 ESD 塾」を開催した。これは、首都圏（麻布大学・東京農工大学・立教大学）と長野県（松本大学）の大学生 14 名が、遠山郷の小中学生を対象に、自然体験活動と学習支援を行う夏季休業中限定の塾である。本事業は、南信濃公民館が主催し、そこに阿部研究室（立教）、朝岡研究室（東京農工）、小玉研究室（麻布）、田開研究室（松本）、増田氏（公益財団法人キープ協会）が協力する形をとり、担当の公民館主事と大学教員が中心となって準備と運営に携わった。また、地域の個人・団体等の直接・間接の支援があったことは言うまでもない。

「自磨の時間」という名称は、廃校となった上村中学校の総合的な学習の時間の名称を受け継いでいる。「ESD 塾」は、4 研究室の教員の共有する研究課題であったことに由来している。3 日間の日程は、下記の通りである。

1) 8 月 10 日の活動

時 間	活 動 内 容
10:00～10:30	・ 開校式
10:45～12:30	・ 自己紹介 ・ 自磨の時間～参加者の自習と学習支援。低学年、中学年、高学年、中高生の 4 グループに分かれて活動する。
12:30～13:30	・ 昼 食
13:30～15:15	・ 自磨の時間～参加者の自習と学習支援
15:45～17:30	・ 料理実習～南信濃地域支援センターにおいて、地域に人と郷土料理を作って食べる。
17:30～	・ 地域主催の交流会～公民館関係者、学校関係者、大学生、大学教員が、地域の人たちと歓談の機会をもつ。

午前中は、大学生が主体となって、アイスブレイクと子ども達の自習への支援を行った。自習課題は、各自が持参した教科や学校の宿題を中心に行った。低学年は、集中できる時間が短いので、図書の読み聞かせやレクリエーションを行った。午後は、自習の後に場所を移して郷土料理の実習を行い、地域で伝承される手巻き寿司や煮物を共同で作った。



2) 8月11日の活動

10:00～10:10	・朝の会
10:15～12:00	・自磨の時間～参加者の自習と学習支援。前日と同様。
12:00～13:00	・昼 食
13:00～16:00	・自然体験活動～（財）キープ協会職員の指導のもと、上村地区の河川で、水棲生物の観察、川遊びを行う。
16:00～16:30	・片付けと着替え
16:30～17:00	・振り返りの時間～上村公民館で、自然体験活動のふりかえりを共有する。

午前中は、前日同様に自習を行った。午後は、上村地区の川に移動して、大学関係者の指導と大学生の支援のもとで、ライフジャケットを着用して川遊びを行った。入る前に、水棲生物に関する簡単なレクチャーと安全指導を行った。本格的な川遊びは、初めての子どもがほとんどで、ずぶ濡れになりながらよい表情で活動ができた。振り返りでは、多くの子どもから好意的な意見が出された。



3) 8月12日の活動

10:00～10:10	・朝の会
10:15～12:00	・自磨の時間～参加者の自習と学習支援。前日と同様。
12:00～13:00	・昼 食
13:00～14:00	・自磨の時間～参加者の自習と学習支援。
14:00～15:00	・お別れの会、閉校式
15:30～	・解散

活動の内容は、自磨の時間が中心で前日と変わらない。この日は、地域の人がかき氷を作ってくれたり、お菓子を差し入れてくれたり、心温まる支援をいただいた。3日間通しで通った子ども達には、公民館から修了証を手渡した。大学生からは、手書きのメッセージを贈った。閉校式には、地元の学校関係者（校長・教頭）、公民館長、自治会長、PTA 会長も同席し、子ども達の様子を見守ってくださった。

3日間で参加した子どもの延べ人数は、70名弱である。



(2) 遠山郷 ESD 塾の成果と課題

2019年10月11日、上村公民館において、主催した公民館主事2名、麻布大学教員1名、各大学の代表学生7名で反省会を持った。そこで総括された成果と課題は、以下の通りである。

1) 成果

- ・子どもの評価が非常に高かった。小学生は、大学生とふれ合う機会自体が貴重で、心の通う交流ができた。中高生は、何気ない会話から進学や進路の参考になった。

- ・上村地区と南信濃地区の子どもが交流できた。普段は、生活圏の違いからなかなか交流する機会がないが、学校とは違う場で共に学ぶ場があった。

- ・参加人数が多かった。お盆の時期に1回につき30名弱の子が参加することは貴重である。

2) 課題

- ・ESDという考え方を、塾の運営の中に十分に反映できなかった。4大学での事前調整を十分にすべきだった。

・自磨の時間の子どもへの関わり方が難しかった。いろいろな個性の子に対応しなければならぬこと、子どもの集中力が持続できないこと、全体の目的が定まっていなかったこと等が挙げられる。

・異なる年齢の子ども同士の交流の時間が持てなかった。

以上の反省を踏まえて、2020 年度も開催することが決まった。

(こだま・としや 麻布大学教授／立教大学 ESD 研究所客員研究員)